第十八講・短歌②、俳句（はいく）

一　次の和歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　秋来（き）ぬと目には<u>さやかに見えねども</u>
　　風の音にぞおどろかれぬる
　　　　　藤原敏行（ふじわらのとしゆき）

B　五月雨（さみだれ）の晴れ間にいでて眺（なが）むれば
　　青田すゞ（ず）しく風わたるなり
　　　　　良寛（りょうかん）

C　※駒（こま）とめて袖（そで）打ちはらふ（う）かげもなし
　　さののわたりの雪の夕暮（ゆうぐれ）
　　　　　藤原定家（ふじわらのさだいえ）

㊟　駒＝馬のこと。

---

(1)　Aの歌の――線「さやかに見えねども」の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　さわやかには見えないけれど
イ　静かな感じに見えるけれど
ウ　だんだんはっきりと見えてきたけれど
エ　はっきりとは見えないけれど

(2)　Bの歌を、五・七・五・七・七の句（く）ごとに／の印を入れて区切りなさい。

五月雨の晴れ間にいでて眺むれば
青田すゞ（ず）しく風わたるなり

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(3)　Ｃの歌は、色彩（しきさい）の対照が美しい歌です。何の色と何の色ですか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　茶色の駒と真っ白い雪の野原
イ　馬に乗る人の黒い姿（すがた）と真っ白い雪の野
ウ　赤く染（そ）まった夕焼けの空と辺り一面の雪
エ　遠くの山の緑と真っ白い雪の野原

[　　]

二　次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

Ａ　みちのくの母のいのちを①一目見ん（ひとめみん）
　　一目みんとぞ[　　]いそげる
　　　　斎藤茂吉（さいとうもきち）

Ｂ　夏の風山より来たり三百の
　　牧（まき）の若馬（わかうま）耳ふかれけり
　　　　与謝野晶子（よさのあきこ）

Ｃ　②くれなゐ（い）の二尺伸（の）びたる薔薇（ばら）の芽の
　　針（はり）やはら③（わ）かに春雨（はるさめ）のふる
　　　　正岡子規（まさおかしき）

Ｄ　晴れし空④あおげばいつも
　　口笛をふきたくなりて
　　ふきてあそびき
　　　　石川啄木（いしかわたくぼく）

(1)　Ａの歌について、次の問いに答えなさい。

㋐　——線①「一目見ん一目みん」には、作者のどのような気持ちが表れていますか。「〜気持ち。」に続く形で答えなさい。

[　　　　　　　　]気持ち。

㋑　[　　]にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　たしかに　　**イ**　なお
ウ　ただ　　**エ**　ただに

[　　]

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(2)　Bの歌について、次の問いに答えなさい。

この歌によまれている情景（じょうけい）として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　山からおりてきたたくさんの馬たちが風にふかれている。

イ　夏山に登ってさわやかな風を受け、喜んでいる馬たち。

ウ　山からふくさわやかな夏風に、若馬たちは気持ちよさそうにふかれている。

エ　山からふく冷たい風に、身のひきしまる思いで作者も馬もふかれている。

（　　）

---

(3)　Cの歌について、次の問いに答えなさい。

Ⓐ　――線②「くれなゐ」とはどんな色ですか。最も近い色を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　あわいピンク　　イ　あざやかな黄緑

ウ　こい赤　　エ　しずんだ黄色

（　　）

Ⓘ　――線③「やはらかに」は、薔薇の新芽の様子を表していますが、そのほかにも、もう一つの意味があります。何の様子を表していますか。「～様子」に続く形で答えなさい。

（　　　　　　　　）様子

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(4)　Ｄの歌について、次の問いに答えなさい。

あ　――線④「あおげば」の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　見上げれば
イ　風を送れば
ウ　青ければ
エ　見つめると

□

い　この歌の鑑賞文として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　快晴の日の空を見ているとかえって悲しみが増し、口笛をふいてごまかしているさびしさが感じられる。
イ　毎日の苦労を忘れさせてくれる青い空に感謝の気持ちをこめて口笛をふくおだやかな春の日が目にうかぶ。
ウ　晴れわたった青空を見ていると、口笛をふいて遊んだ少年のころがなつかしく思い出される。
エ　口笛が得意なので、みんなに聞かせたくなっていつもふいてしまう気持ちがよくわかる。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

俳句

俳句とは、江戸時代の中ごろに成立した世界で最も短い定型詩で十七音から成り、季語がよみこまれている。

五	七	五
柿くへば	鐘が鳴るなり	法隆寺
上の句	中の句	下の句

・字余り　音数が十七音より多くなること。
・字足らず　音数が十七音より少なくなること。

◆季語◆

季節を表す言葉。季節は旧暦によって分けられていて、「歳時記」にすべての季語がのっている。

春（一～三月）　のどか　彼岸　霞　朝寝　つばめ　かえる　よもぎ　雪解け　桜　たんぽぽ　つくし　卒業　花見

夏（四～六月）　梅雨、五月雨　田植え　短夜　夕立　葉桜　若葉　いちご　ほたる　うちわ　風鈴

秋（七～九月）　天の川　七夕　名月　台風　赤とんぼ　雁　朝顔　すいか　りんご　柿　もみじ　すすき

冬（十～十二月）　寒さ　大みそか　時雨　こがらし　七五三　ふとん　炭　風邪　クリスマス　落ち葉　白菜　枯れ草

◆表現技法◆

・句切れ　意味や調子が切れる
　名月や　／　池をめぐりて　よもすがら

・切れ字　「や」「かな」「けり」など、句切れを起こすことば

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

三　次の文章と俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

俳句は、江戸（えど）時代、松尾芭蕉（まつおばしょう）がかつやくしたころ（三百三十年ほど前）にさかんになりました。五・七・五の十七音で作られ、季節を表す「季語」をよみこむ約束になっています。ただ、音数は、短歌の場合もそうですが、いくらか増減があってもかまわないことになっています。

A　古池や蛙（かはづ（ワズ））飛びこむ水のおと　　松尾芭蕉

〈教科書書きおろしによる〉

(1) Aの俳句の中から季語をぬき出し、その季節を答えましょう。

季語

季節

(2) Aの俳句はどのような光景をよんだものですか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア　大きな池のほとりでの光景。
イ　静かな池のほとりでの光景。
ウ　美しい池のほとりでの光景。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(3) この文章で述べていることとしてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 短歌や俳句には季節を表す「季語」をよみこむ約束がある。

イ 短歌や俳句には音数のきまりがあるが、必ずしもその音数でなくてもよい。

ウ 『万葉集（まんようしゅう）』が作られたのは千三百年以上も昔のことである。

エ 『万葉集』は松尾芭蕉により作られた歌集である。

□

四 次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　名月や池をめぐりてよもすがら　　松尾芭蕉

（あまりに月が美しいので、池をめぐりながら見とれていたらとうとう一晩（ひとばん）過（す）ごしてしまったよ。）

B　雪とけて村いつ（っ）ぱいの子どもかな　　小林一茶（こばやしいっさ）

（雪に閉（と）じこめられていた長い冬がようやく終わり、春の陽（ひ）ざしに、雪が段々（だん）とととけていく。子どもたちは待ってましたとばかり外に遊びを楽しみ始め、村は子どもでいっぱいになった。）

C　赤とんぼ筑波（つくば）に雲もなかりけり　　正岡子規（まさおかしき）

D　夏の蝶（ちょう）日かげ日なたと飛びにけり　　高浜虚子（たかはまきょし）

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(1) A・Bの句の季語と季節を答えなさい。

A　季語［　　　　］　季節［　］

B　季語［　　　　］　季節［　］

(2) C・Dの句の鑑賞文として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　色彩の対照が美しく、春ののびのびとした情景が思いうかぶ句。

イ　強い日ざしの快晴の夏の日、光の明暗を対照させた絵のような句。

ウ　秋の静けさが心にしみ、ふるさとへのなつかしさが伝わる句。

エ　秋晴れの澄んだ空が目にうかぶさわやかな句。

C［　］　D［　］

五　次の俳句と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　とどまれば　①あたりにふゆる蜻蛉かな　　中村汀女

【鑑賞文】

ふと立ち止まって空を見上げ、「まあなんと、こんなにたくさんのとんぼが飛んでいるのだわ」という句です。歩いていたときにも、とんぼの飛んでいたことは知っていました。とは言え、池があり、秋の草花があちらこちらにさく名園*ですから、ほとんどそのほうに注意が向けられていたのでしょう。立ち止まってはじめてとんぼの数多さに気がつき、まるで自分が立ち止まったために、とんぼが急にわき出してきたように感じたのです。

（鷹羽狩行「ジュニア版　目でみる日本の詩歌⑮　現代の俳句」より）

＊名園＝三溪園。横浜にある日本式庭園。作者がこの庭園をおとずれたときに作られた句。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

B　海に出て木枯（こがらし）②帰るところなし　　山口誓子（やまぐちせいし）

【鑑賞文】

「木枯」は、秋の終わりから冬の初めにかけてふく、北西寄（よ）りの季節風のことです。強い音をたてながらふきあれ、木々をふきからすことからこの名がつきました。冬の季語です。陸上をふきにふき、あれにあれた木枯（こが）らしも、やがて海上に出た。からすものも、さえぎるものもない海上を、当てもなくどこまでもふきわたっていく木枯らしには、もう、もどるべきところがない……。「帰るところなし」は木枯らしを人のように見た表現で、これによって、やがて消えうせるしかない木枯らしのなげきが、伝わってくるようです。

（鷹羽狩行「ジュニア版　目でみる日本の詩歌⑮
現代の俳句」より）

---

(1)　Aの俳句に使われている切れ字をぬき出しなさい。

□

(2)　――線①「あたりにふゆる蜻蛉かな」とありますが、なぜ作者は「蜻蛉」が「あたりにふゆる」と感じたのですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　庭園の中でも、とんぼが多くいる池のまわりを歩いているから。

イ　作者の目は庭園の風景に向いていたので、立ち止まったときにはじめてとんぼの数の多さに気づいたから。

ウ　草花の中で立ち止まった作者におどろいて、蜻蛉が急にわき出してきたから。

エ　秋の草花を見て、はじめてとんぼが多く飛ぶ季節になったことに気づいたから。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(3)　――線②「帰るところなし」の説明として、鑑賞文の内容にあてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　木枯に対する人間の気持ちで、冬がやってきて外へ出られないことへの不満を表している。

イ　木枯に対する人間の気持ちで、強い木枯で家に帰ることができなくなる不安を表している。

ウ　木枯を人にたとえていて、海上に出てどこまでも行ける木枯の自由さが感じられる。

エ　木枯を人にたとえていて、海上に出て行くあてのない木枯のさびしさが感じられる。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十八講・確認テスト

次の言葉はいつの季語なのか答えなさい。

1　入学式
ア　春　イ　夏　ウ　秋　エ　冬

2　梅雨（つゆ）
ア　春　イ　夏　ウ　秋　エ　冬

3　大根
ア　春　イ　夏　ウ　秋　エ　冬

4　天の川
ア　春　イ　夏　ウ　秋　エ　冬

5　雪解け
ア　春　イ　夏　ウ　秋　エ　冬

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十八講　短歌②、俳句（はいく）

一
(1) エ
(2) 五月雨（さみだれ）の／晴れ間にいでて／眺（なが）むれば／青田すゞしく／風わたるなり／
(3) イ

二
(1) ㋐（例）母に早く会いたい（気持ち）
　㋑エ
(2) ウ
(3) ㋐ウ
　㋑（例）春雨がふる（様子）
(4) ㋐ア
　㋑ウ

三
(1) 季語…蛙（かはづ）
　季節…春
(2) イ
(3) イ

四
(1) A季語…名月
　季節…秋
　B季語…雪とけて
　季節…春
(2) Cエ
　Dイ

五
(1) かな
(2) イ
(3) エ

〈確認テストの解答〉
1 ア　2 イ　3 エ　4 ウ　5 ア

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。